

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

平成 23 年 10 月 31 日

派遣者氏名(専門分野)	渡部 玲子 ( イラン都市研究 )
-------------	-------------------

下記のとおり報告します。  
記

研究テーマ	テヘランにおける自治体の役割の変遷
-------	-------------------

派遣期間

平成 23 年 8 月 23 日 ~ 平成 23 年 9 月 2 日
------------------------------------

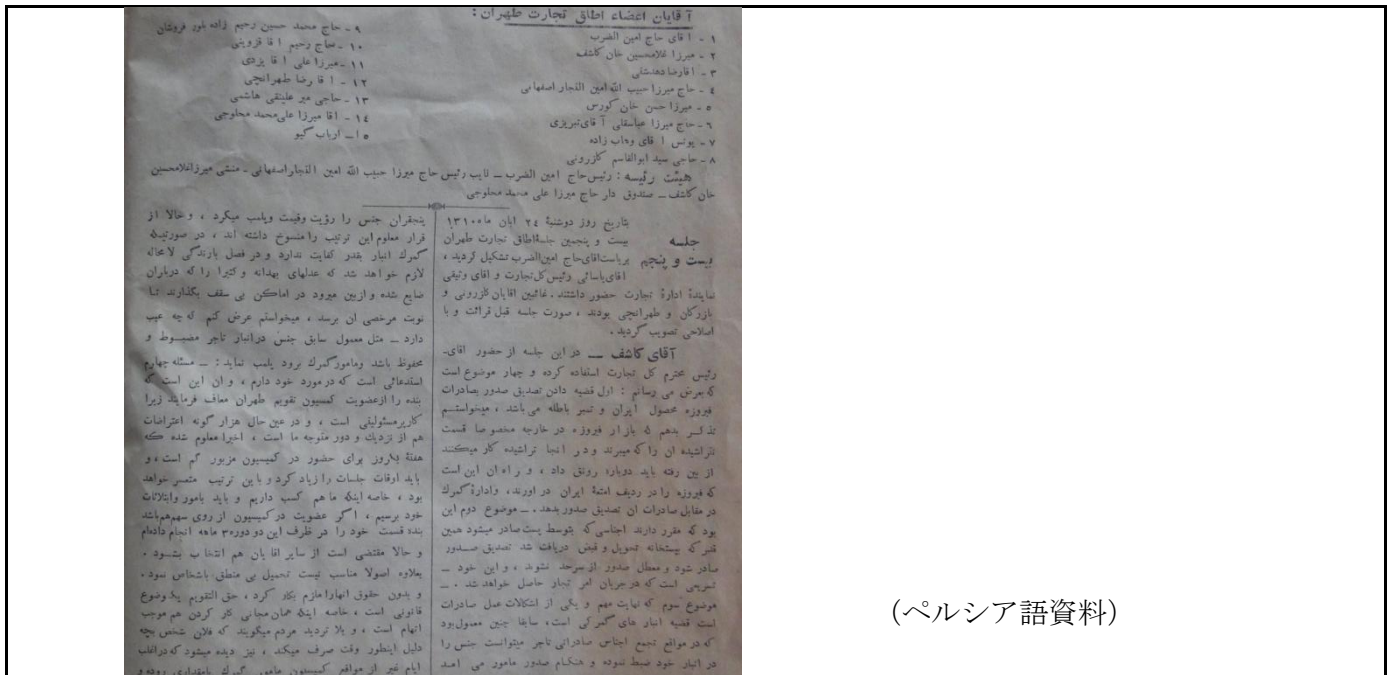
訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	フランス	パリ	フランス国立図書館	なし

派遣先で実施した研究内容

報告者はこれまでイランの首都テヘランを対象に都市研究を行ってきた。修士論文のテーマとしては、18 世紀以降を中心としたテヘランについて、自治体の役割が伝統的なものから近代的なものへどのように変遷していったかを考察していく。研究を進めていくうちに、都市行政についての資料や先行研究が日本国内では限られており、歴史的にイランとの関係の強かったフランスでは、日本国内あるいはオンライン上で見られない、手に入らない資料があるのではないかと考えた。またフランスではイランなど中東地域での都市研究が盛んであり、資料同様フランスの研究者による研究書も収集したいと考えた。また研究書に加え、18 世紀以降のイラン社会について記述したものとして、ヨーロッパ人によるイラン（ペルシア）への旅行記も収集の対象とした。これらフランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France, 以下 BnF）が有するテヘランについての資料収集を目的として、今回 OVC 派遣プログラムに応募した。なお今回の派遣では特に、フランスにある歴史的史料の収集を中心とすることでイランの伝統的な社会についての記述を見つけ、当時の自治体の分析に役立つことが期待できると考えた。

調査の内容は以下の通りである。8 月 24 日にフランス国立図書館での利用登録を行い、翌日から本格的に調査にあたった。報告者が調査を実施した図書館は BnF のみで、主に François-Mitterand 館では、研究書や新聞のマイクロフィルムなどを調査した。Richelieu 館では、地図や旅行記を調査した。ペルシア語資料も、1930 年代の商工会によるバーザールについての雑誌を、部分的にはあるが得ることができた。（写真）また、Le Journal de Téhéran という新聞についても見つけることができた。Le Journal de Téhéran は、1935 年に創刊されたイランにおける最初のフランス語による日刊紙である。時代的にはイラン最後の王朝パフラヴィー朝の時代のもので、王室関係やテヘラン全般についての記事に加え、ヨーロッパの情勢などが掲載されていた。記事目録等も見つけられなかったため、実際に BnF で見てどのような記事を扱っていたかが明らかとなった。

今回の派遣においては、図書館の利用方法、調査方法など資料収集の方法を広く学んだ。オンラインで見られない資料や、図書館にあってもカタログ上閲覧不可となっている資料も直接司書と交渉することで見ることができ、実際に現地の図書館に来たからこそできる調査を実感できた。



(ペルシア語資料)

**研究の当初の目的、計画の達成状況、明らかにできた成果**

今回の収集することができた主な資料は、研究書・新聞・ペルシア語資料・旅行記である。収集した資料は現在読解中であるが、今回 *Le Journal de Téhéran* を実際に見ることができ、イランとフランスの関係という視点について、両国の関係の強さを裏付ける資料が明らかになったと考えている。BnFにはマイクロフィルムとして1935年3月15日から1979年3月27日まで所蔵されている。これは報告者が研究対象とする時代と被る部分であるため、当時の自治体や行政についての記述だけでなく、社会状況を知るといふ点でも、新聞が役に立つことが期待できる。

今後は、収集した資料の読解を進めながら、今回収集した資料から歴史的・伝統的なテヘランの自治体がどのような組織であったか、どのような役割を果たしていたかについてより深く分析していきたい。それをふまえることで現在のテヘランの自治体との比較・変遷を考察することができると考えている。

**派書後の研究発表の予定**

2010年9月29日に行われたOVCプログラム横断的研究視察報告会での成果報告、および修士論文に今回収集した資料を反映させて発表する予定である。